

大きく大きくみえた大平さん

園田直

大方の予想に著しく反して、首班指名で大平さんに投票するなど濃いつきあいが始まったとたん、永遠の別れとなつてしまつた。そういう大平さんとおつきあいが初めはまるでなかつた。党が異なつていたからである。大平さんは自由党、私は改進黨というのが出合いの昭和二十七年十月総選挙後のことであつた。大平代議士にとつて初めての本会議で、隣席にいた荒船清十郎さんが「オイ、変つた顔の奴が当選してきたぜ」というので、初めて見たのが大平さんとの出合いである。

ところが、それつきり、これといつたつきあいはなかつた。保守合同で同じ自民党に所属したものの、大平さんは主として政策畑を歩き、私は議運、国対族として働いたからである。初めての国対委員長も池田内閣のもとでつとめたが、大平さんはその時は外務大臣をつとめておられたから、没交渉のうちを過ぎた。

それが急速に近くなるのは福田内閣の成立をめぐるつてである。昭和五十一年十一月末。

三木内閣は間違ひなしに総辞職するだろうが、そのあとは自然の流れからすると大平内閣が成立する。それはそれで良いことだが、しかし私のかついできた福田赳夫さんがそれでは、ひよつとすると永久に政権をとれなくなるというので、大平さんに頼みこんだのがホテル・パシフィックでの五者会談であつた。福田、大平に鈴木善幸、園田直に加えて保利茂さんが立会人みたいにして同席した。この席ではむずかしいことは大平さん、ひとことともいわなかつた。そればかりか、福田さんが総理を二年つとめて、「それから先のことをどうするか」という話

になった時、大平さんが初めて口を開いた。「二年後のことを今ここで話し合っても仕方ないんじゃないでしょうか。二年後のことは二年後にあらためて話し合うことにしようじゃないですか」。

下司なら「二年後に政権を大平に渡す」と文書にしろ」と迫るところである。しかし大平さんはその逆を行った。私は胸に迫るものがあつた。

「保利さん、大平さんに負けました。これじゃ二年後、私たちは大平政権樹立のために走りまわることを約束させられたようなものですね」と、帰り途、話し合ったことだつた。後年、衆議院本会議場で大平さんが福田さんと首班を争わざるを得なくなつた時、福田派の私があえて大平さんに一票を投じたのには、そうした想いがこもつていたのである。互いに何もいわなくても通じるものがあつた。隣の席にしながら二人はそのことに何もふれようとしなかつた。大平さんが大きく大きくみえたのであつた。その日を境に私は無役になつたが、心はさわやかであつた。

日米首脳会談にお伴した時、ワシントンの宿舎で、志げ子夫人をいたわつて、「ここへきてお座りよ、なんつたつて、おかあちゃんの元気なのが何よりしあわせなことなんだから……」といわれた。この人は果たして本当に明治生まれの日本人なのだろうか、と大正生まれの私はショックを受けた。ところが、夫人が部屋を出ていかれたら、「ああいつとけば喜んでるんだから安いもんだ」といったので二度びつくりした。

しかし今、考えてみると、そういうのは私へのテレかくしであつて、本心は自分の健康を気遣つてくれるたつた一人の人への感謝の言葉なのであつた。大平さんに持病があるなんて知らない私には分かることのできないことだつたと、その死によつて知つた。

(厚生大臣・第一次大平内閣外務大臣)